

【肺がん検診と治療】

医療法人慶仁会城山病院院長 李雅弘

平成十二年にがんや白血病などの病気(悪性新生物)で亡くなった方は全死亡者数の約三〇・七%を占めていたと厚生労働省は報告しています。そしてその割合は毎年増加傾向にあります。

中でも肺がんは 53,724 人と悪性新生物の内の一人2%を占め一番多いという結果です。身の回りで肺がんになってしまった方がいる人は、胃がんや大腸がんあるいは乳がん、前立腺がんに比べ肺がんは進行が早い、あるいは肺がんと診断されてからすぐに亡くなってしまったと感じてはいませんか。それにはいろいろなわけがありますが、大きな理由はがんとしての性質が悪く薬や放射線の効き具合が良くないこと、また、肺が直接命にかかわる臓器であることから、がんができてから手術で取り除くことができるまでの時期が限られていることなどが挙げられます。そして残念なことに肺がんが体に悪さをして自分で分かるような症状を出すようになるのは、かなり大きくなってからか、あるいはがんのできた場所が悪いかという状況で、そのときにはすでに手術不能ということが多いのです。(実際、肺がんの手術は肺がん患者全体の 20%ほどにしか行われていないのです。)

したがって手術や内視鏡などでがんをなくすことができる時期に発見するためには、自分ではまったく症状がないときに見つけ出すことが必要となり、そのために肺がん検診を行っているのです。もちろん中には進行が早いがんもあって、毎年検診を受けていても治療が難しいこともあります。少なくとも自覚症状がでてからより治る可能性は高くなります。ぜひ検診を受けるようにしてください。

(新開等でも承知とは思いますが、日本は先進諸国の中ではとくに喫煙率が高く、がんを予防する意識が低いという評価をされています。がんになってから治療するよりはがんにならないことです。)
